

04.2.27

一人ひとりを表彰

子ほめ条例

少子化の町村で広がる

地域全体で子どもを育てようという条例が、少子化の進む町村を中心に広がっています。通称「子ほめ条例」。大人が子どもたち一人ひとりのよいところを見つけて、表彰するのが特徴ですが、「ほめ方」は難しく、課題もさまざまです。自治体も研究着実に「ほめ方」についての研究を進めています。

(藤原孝子)

「自分のよさを気づいた」

「おなだは人じゆん」となぐ活発に学校生活を送ったので町の決まりの表彰に「まず」活発賞、朗読賞、学芸賞、親切賞、愛鳥賞……。子どもたちが名前を呼ばれ、壇上へ上がって、賞状と記念の銀メダルを贈られた表情で受け取っていました。

11日、山口県錦町で開かれた「子ほめフォーラム」。寺本隆宏町長から賞状をもらった23人は、島根と広島の県境にある人口4千人の町の二つの小学校の6年生全員だ。代表して神田光さん(11)が「表彰していただき、おかげで自分のよさに気づきました。こ



緊張した表情で賞状を受け取る子どもたち
＝山口県錦町の錦ふるさとセンターで

のメダルを渡されたとき、自分について進んでいきたいです」とおぼろげに生かすに頑張った。会場を出た子どもたち「メロロロ」として、徒競走に関する条例」を

地域で見守る目 大人に問われる

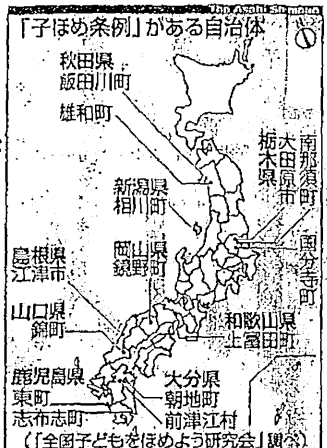
作った。目的は、子どもたちの長所を、地域全体で見いだすこと。二つの小学校のほとんどの学年が1学級しかない。地域のつながりの深さを生かし、学校が推薦、全員を卒業時に表彰する。メダルの色はすべて銀。さらに長所を伸ばしてほしいという願いを込めた。15年間で受賞者は593人。全町民の約15%にあたる。最初の受賞者はすでに26歳だ。98、00、03年、成人式で町がメッセージをしたところ、6割以上が自分ももらった賞の名前を覚えていて、7割が「人生のプラスになった」と答えたという。

昨夏、甲子園に出場した岩国高校野球部の主将を務めた3年の松原優さんは、「リーダーシップ賞」をもらった。「当時、みんなを引っ張って感じたのが抵抗があった。でも今は『よく見ていてくれたんだな』と感謝している」と振り返る。

難しいのはどうほめるか。「実際と違っていることをほめたら逆効果になる。大人が子どもをちゃんと見ているかが問われます。山口県錦町の光貞正明教育長は明かす。島根県津江市(人口約2万5千人)では条例を少年犯罪が相次いだこともあり、子どもの育ちを考えるために自治体や大分県前津江村で開催された。昨年3月には、第1回「子ほめフォーラム」が大分県前津江村で開催された。表彰する回数は一義務教育の間に1人必ず1回1の所もあれば、1人4回まで1の所もある。賞の名前も「奉仕賞」「伝統文化賞」「エコー賞」「スマイル賞」など、様々だ。

全国14自治体で制定

「子ほめ条例」は正式には、「児童生徒表彰条例」などと表記されるものが多く、小学校や中学校の卒業までに自治体が表彰するもので、85年、栃木県国分寺町(人口約1万7千人)が全国に先駆けて制定した。以来、鹿児島県、治体にある14自治体がある。注目を集めるようになり、2009年ごろから、学の子どものよさをほめる研究会」を01年発足。同研究会によると、推



「全国子どもをほめよう研究会」